大学院のゼミにおける「首振り」の表現

日付　S09（アルファベット・カナ表記）

1. はじめに

談話分析の中で、一つの分野は非言語表現である。談話のときに非言語の表現は、言葉を使わずに独立で、あるいは発話に伴って使われる。ヴァージニア・P. リッチモンド等（2006）によると非言語メッセージは、「外見的特徴、ジェスチャと動作、表情と視線行動、音声行動、空間、接触（p. 12）」六つに分類できる。

本稿の目的は非言語表現の首振り[1]に着目し、大学院のゼミの談話の中で、どのような非言語表現を使うのかを明らかにすることである。

留学生教育にとって、大学院のゼミの談話を分析することに通して、留学生たちがゼミなどの多人数の談話での方法を身につける、というメリットがある。特に多人数の相手に説明するときに、首振りがどんな役割を果たすのか、その回数と時点など。この問題が答えられれば、日本語学習者は多人数の談話での自然な非言語表現を知るため、ゼミだけではなく、たいてい会議でもより参加しやすくなるであろう。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話における非言語表現について扱った研究には、ザトラウスキ（2002，2010）、山田(1992)などがある。

まず、ザトラウスキ（2002）は、日本人とアメリカ人を被験者をし、セリフがないアニメーションを見せながら、母語と非母語の言語（日本語と英語）でそのアニメーションの内容を語ってもらい、その結果を分析している。それから、ザトラウスキ（2010）は、授業を対象に講義者はどのような時に身振りを用いるのかという問題について、身振りを七種類に分け、講義者の台詞と身振りを文字で併せて記録することで、分析している。

次に、小池(2003)は大学院生の、日本語母語話者の７人とタイ語を母語とする日本語学習者の 14 人と会話を行った。日本語母語話者にとって、相づちと頷きの欠如が会話のしにくさの一つのと分かった、

また、山田(1992)は 10 人の日本人と２人の留学生の談話を録画し、話者が撮影機材を意識しなくなった 10～20 分間から、首振りの頻度、国による相違、文の中の首振りが現れる位置などを明らかにしている。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、説明の仕方という観点から扱った研究はない。そこで、私は多人数の談話に用いている首振りで分析を行うことにしたい。

この分析で、非言語行動がどのように内容の伝達を支えるかが明らかになり、首振りが多人数の談話でどんな役割があるかということを解明し、日本語教育に役立ちたいと考えている。

[1] 首振りは、山田(1992)に従い、頭部の縦振り動作とそれに準ずる上半身の動きと定義する。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの一つの 40 分程度の談話である。内容は絵本を日本語の読解クラスのテキストにするという内容が発表したあと、発表者と質問者ＡＢと先生の討論のビデオであった。

その映像資料と談話の文字化資料からデータを抽出する。誰か、どのような時点で、頷くかを記録し、ゼミにおいて頷きの機能、個人差の存在するか否か、について明らかにしたいと考えている。

3.1 談話者の情報

	世代	母語話者であるか？	略称
発表者 A	20 代	はい	A
先生 A	60 代	はい	T
質問者 A1	40 代	はい	A1
質問者 A2	20 代	いいえ	A2
質問者 A3	30 代	はい	A3
質問者 A4	20 代	いいえ	A4
参加者 A5	20 代	いいえ	A5
質問者 A6	20 代	いいえ	A6

表１

3.2 表記方法

文字化資料の内文に、談話者が頷くところの後ろに、「談話者の略称/頷く場合」のように記録する。

発話者が頷く場合				
	机を見て頷く	特定の相手を見て頷く	皆を見て頷く	
	S1	S2	S3	
聞き手が頷く場合				
	発話者は机を見ている	発話者に注視される	発話者が皆を見ている	発話者が他人を注視している
発話者が頷く	C1	C2	C3	C7
発話者が頷いていない	C4	C5	C6	C8

表２

4. 分析の結果

4.1 首振りの回数と個人差

	S1	S2	S3	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	数
A	39	34	50	4	43	25	9	48	9			261
T	15	26	53			2			3	2		101
A1	6	47	0	5	22	21	18	34	17	6	6	182
A2		2	0	1	3	3	1	7	3		2	22
A3	3	13	2		3	3	5	5	5	9	3	51
A4		3			2				4	1	1	11
A5												
A6						4	2		7	4	3	20
数	63	125	105	10	73	58	35	94	48	22	15	

表３

数に個人差が見られても、全体としては、s3（発表するとき皆に向かって頷く）と C5（他人の談話を聞いているとき、談話者に注視され、でも談話者は頷いていない）と C2（他人の談話を聞いているとき、談話者に注視され、そして談話者は頷いている）の三つのパターンが最も多かったと分かる。つまり、人数が多くても、一対一の、会話のような相づちの形が好まれる。

4.2 頷くの時点

ゼミの中で発言者が言いながら頷くとき、使う表現を数えたら、首振りのよく使うタイミングが明らかになった。

	S1	S2	S3	S1~S3 の数
キーワード	21	14	18	53
肯定的表現：です・ます・できる	4	8	18	30
逆接	3	12	13	28
否定形・マイナスの表現	4	11	9	24
疑問文	4	11	7	22
～ね	5	9	2	16
～て/し	4	4	4	12
対比の表現	3	5	3	11
はい	3	7		10
例文・例示		2	8	10
ので・から・よって		6	3	9
主観な表現～たい・と思う・かな		5	4	9
んです/んだ	1	5	2	8

まあ/あの	2	5		7
すごい/結構	3	1	1	5
仮設		3	2	5
主語	1		3	4
～ていう		3		3
～も	2			2
おじき	2			2
ている		2		2
限定		2	0	0

①強調する
②否定や自分の意見を表すとき、柔らかくする
③相手の人の賛成を求める
④言い直す

4.3 首振りと視線の関係

視線が合って、頷きの場合、相手の人は殆どすぐに返事する。談話調節（相手の人は分かっているかどうか確認する・自分がまだ話し終わっていないことを表す）の機能が果たしている。

例： 先に伺わいたかったんですけども（発表者Ａ：はい）
英語教師の中でも（発表者Ａ：はい）

参考文献

- 小池真理(2003)「日本語母語話者は第二言語話者との会話をどのように評価するか」北海道大学留学生センター『北海道大学留学生センター紀要』7　pp. 16-33
- 西尾新（1997)「発話に伴う身振りの表記法作成の試み」『京都大学教育学部紀要』43 pp. 149－160
- 西尾新（2006)『発話にともなう身振りの機能』風間書房
- ザトラウスキポリー（2002)「日米におけるアニメーションのストーリー語り方と非言語行動の相違」水谷修　李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会　pp. 187－201
- ザトラウスキポリー（2010)「講義の談話の非言語行動」佐久間まゆみ『講義の談話の表現と理解』くろしお出版　pp. 287－204
- 山田美樹(1992)「談話における非言語行動の一側面 ： 首振り動作・視線と談話との関係について」『阪大日本語研究』 4, pp. 33-58
- ヴァージニア・P. リッチモンド , ジェイムズ・C. マクロスキー（2006)『非言語行動の心理学―対人関係とコミュニケーション理解のために』北大路書房